学　校　便　り　　琢磨

令和３年度　第 11 号　R3.7.1 三豊市立詫間小学校

HP https://mitoyo.schoolweb.ne.jp/mitoyo/takuma-e/

栄光を讃える！

６月２７日（日）。丸亀市の Pikara スタジアムで開催されました「第３７回全国小学生陸上競技交流大会　香川県最終予選会」に、本校から、１次予選を突破した５、６年生が出場しました。

この大会での入賞者は以下のとおりです。(敬称略)

【共通女子コンバインドＡ（80m ハードル・走り高跳び)】

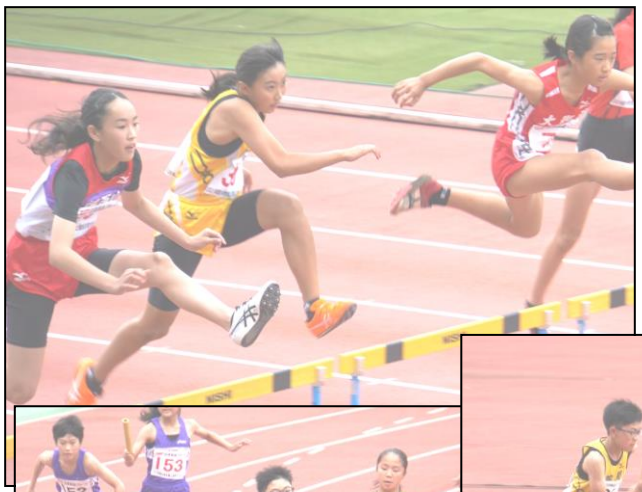
第２位　１８７２点　冨山　琴音　　第６位　１６２５点　山地　愛子

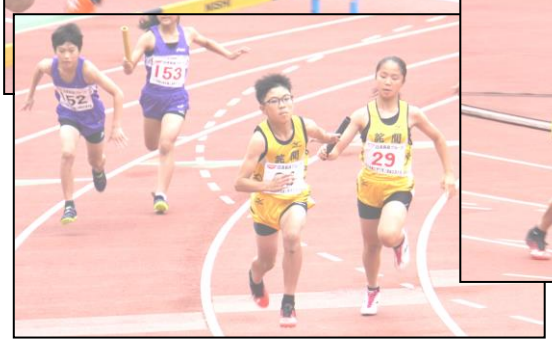
【６年男子 100m】

第３位　１３秒６５　資延　侑梨弥

【共通男女混合 4×100m リレー】

第２位　５４秒４９　松村　みそら　　妹脊　心　　山下　稀歩理　　資延　侑梨弥





今後の主な行事の見通しについて（夏休み～９月）

【中止が決定しているもの】

○　~~地区水泳記録会~~　　○　~~たくま港まつり~~　　○　~~夏休みのプール開放~~　　○　~~夏休み作品展~~

【実施するもの（一部内容・方法の変更あり)】

○　ＰＴＡ本部役員会（8/27）　○　ＰＴＡ各部委員会（9/3）

○　ＰＴＡ奉仕活動（8/29）･･･保護者（ＰＴＡ役員）のみ参加で実施予定（児童の参加は無し）

○　運動会（9/25）･･･午前中に体育発表会として児童及び保護者入れ替え制（３交代）で実施予定

例：8:45～ 9:30　１・２年生の表現、色別対抗リレー、競争遊技など（１・２年保護者のみ）

9:45～10:30　３・４年生の表現、色別対抗リレー、競争遊技など（３・４年保護者のみ）

10:45～11:30　５・６年生の表現、色別対抗リレー、競争遊技など（５・６年保護者のみ）

○　資源回収２分館（9/26）･･･児童、生徒、教職員の参加は見合わせる

「真鍋校長の独り言」その７

私の田植え体験

昭和４０年代。その頃、私は小学生でした。今では考えられないことですが、当時は「農繁休業」というのがありました。簡単に言えば、米作りの作業が大変忙しくなる田植えの時期と稲刈りの時期に、学校が休みになるというものです。

担任の先生から「来週の月曜日と火曜日は、農繁休業です。この辺りは、今週の土曜日から来週の火曜日頃までに田植えをするということです。農家の子どもたちは、しっかり田植えのお手伝いをしなさい。農家でない子どもたちは、学校があります。いつものように登校しなさい。ただし、親戚や近所の田植えを手伝うという人は、学校に来なくてかまいません。しっかりお手伝いをしなさい。」というようなことを言われます。この頃は、土曜日の午前中は授業がありましたので、土曜日は、学校から帰ってすぐに田んぼに向かうという子どもたちも多かったのです。

さて、今とは違ってかなり大らかな時代です。誰が農繁休業で休むとか、誰が学校に来るとかを事前に細かく調査するということはなく、来ていない子は、病気などの欠席の理由がなければ「農繁休業」みたいな感じでした。例えば、「〇〇君は、農家じゃないけど、どこかの田植えの手伝いをすると言うとったか？」と先生に聞かれ、「〇〇君は、□□さんの田植えを手伝うと言うとったで。」と子どもが答え、「そうか、ほんなら〇〇君は、農繁休業。」みたいな感じで農繁休業が決定する場合もありました。また、農繁休業が終わって登校した時に「△△さん。どこかの田植えの手伝いをしたか？」と先生に聞かれ、「はい、おばあちゃんちの田んぼです。」と答えると「はい、農繁休業ね。」となる場合もありました。

私の家は農家ではなかったのですが、田植えの手伝いをするという理由をつけて何とか休みたかった私は、米作りもしている瓦屋の祖父に言いました。「来週の月曜日は、田植えやろ？手伝おうか？」と。すると、「いや、人手は足りとるからええわ。長男が田植えのために帰ってくるし、瓦屋の職人さんも手伝ってくれるからの。」と。何としても学校を休みたい私は、「いやあ、それでも人手は多い方がええから手伝うわ。」と私。「そうか、ほんだらお願いしようかの。」と祖父。こんな風にして、私は祖父の田植えの手伝いを少しだけして、農繁休業で学校を休んだのです。祖父は兼業農家（瓦屋と米作り）だったので田はあまり広くなく、田植えは１日で終わります。しかし、学校は２日間休むことができるのです。嘘をついて休むのは心が痛い（本当はばれたら叱られるから）ので１日は、しっかり田植えの手伝いをしたものです。

当時、田植えの機械はありませんでした。２０人くらいが横一列に並んで張ったひもの所に１０本くらいずつ植えては下がり、植えては下がりを繰り返していきます。稲の苗は、無くなりそうになると、祖父が足下に向かって向こうから投げてくれます。祖父は、指揮者もしながら、苗の調達係もしていました。その苗の束が、バシャーンと足下近くに落ちた時に、頭から泥水がかかることもありました。

田植えは、腰が痛くなりますが、それは我慢できます。どうしても我慢できないのが、田んぼの中でヘビが泳いでいることがあり、そのヘビが足の近くに来ることだったのです。ですから、私は、田植えをする時は「タクマさん」という屈強な瓦職人さんの隣で植えるようにしていました。「タクマさん」は、ヘビが泳いで来ると、さっと手でヘビの首の所をつかんで、２０ｍくらい離れた道路の向こうにヘビを投げます。空中で紐のように踊りながら飛んでいくヘビを見て、タクマさんを尊敬したものでした。

この農繁休業も田植え機の普及によってだんだん無くなりました。私が小学校の高学年になった頃にはもう完全に無くなっていたと思います。まだ人手を貸し合っていた頃のかすかな思い出が、あぜ道で、みんなでお昼ご飯を食べたことが、この前、５年生が昔ながらの田植えをしている姿をみたことで急によみがえってきたのです。